

2025 年 9 月 28 日 説教「ソロモンやヨナよりも」

ルカの福音書 11 章 27～32 節

11 章は「主の祈り」の教えに続き、「求めよ、捜せ、叩け」という願いの祈りについて、夜中に訪問者のため執拗にパンを求めるたとえを通して学び、前段では悪霊の働きについて教えられました。

1. 女が声をはりあげて (27～28 節)

- ①イエスを産んだ腹 (27) **「イエスが、これらのことを話しておられると、群衆の中から、ひとりの女が声をあげてイエスに言った。『あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。』」**

イエス・キリストが人々を教え導き、悪霊を追いついたりするなかで、群衆のなかから、ひとりの女性が大声で言ったのです。「あなたを産んだ腹、あなたが吸った乳房は幸いです。」と。要するに、こんなすばらしい働きをしている方の母である人、乳をのませることや、育児に関わらせていただいた母親を幸いだということです。単純に「あの方の母親は幸せだ」と言っているのかもしれませんが、そこには羨みの心が感ぜられます。自分のみじめさを覚えているのかもしれませんが。

- ②幸いなのは (28) **「しかし、イエスは言われた。『いや、幸いなのは、神のことばを聞いてそれを守る人たちです。』」**

私たちは自分が幸せであるかどうかを、人と比較して考えやすいです。ここに出てくる女もマリヤと自分を比較して「彼女は幸せだ」と声をあげて言ったのです。「山のあなたの空遠く、幸い住むと人の言う」とカール・ブッセは詠いました。幸せはどこにあるのかと人は求めるのです。彼の地に行けば幸いがあるに相違ないと言われて、行ってみてもそこにはない。幸いはどこにあるのでしょうか。主イエスは「心の貧しい者は幸いです」(マタイ5:3)と語り始め、八つの幸いをお教えくださいました。そこには意外なものもありました。「悲しむ者は幸いです」や「義のために迫害されている者は幸いです。」も入っています。これらは一般的には幸いとは言えないでしょう。今、ここで、イエスは女の言葉に対して、「いや」と否定された上で、「神のことばを聞いて、それを守る人が幸いだ」とイエスは教えられました。幸せには条件はなく、今現在その人が主なる神と共に歩み、その御言葉によって生きるならば、その者は幸いだと言われるのです。

2. 人の子がしるしに (29～30 節)

- ①悪い時代 (29) **「さて、群衆の数がふえてくると、イエスは話し始められた。『この時代は悪い時代です。しるしを求めているが、ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。』」**

イエスの周囲には人々が大勢集まってきました。その時に、イエスは話し始められたのです。『この時代は悪い時代です』。人々は悪霊に惹かれ、求めることは、驚くようなしるし、大きな奇蹟を求めるのです。しかし、しるしはすでに預言者ヨナの働きを通して、神はなしてくださったのです。それ以上のことをどうして、与えられるでしょうと、イエスは言われます。

②しるしとなったヨナ（30）『『というのは、ヨナがニネベに人々のために、しるしとなったように、人の子がこの時代のために、しるしとなるからです。』』

というのも、ヨナはニネベに遣わされるにあたって、神からの大いなる恵みをいただき、神のしるしを示していただきました。大きな魚に飲まれ、なおかつ生かされ、用いられたからです。それと同じように、人の子イエス・キリストは、十字架から復活を通して、この時代の人々に神の究極的なしるしを示してくださることになると教えられています。

3. 当時の人々を罪に定める女王やニネベの人々（31～32 節）

①南の女王（31）『『南の女王が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、彼らに罪を定めます。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし、見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです。』』

ここに南の女王とありますが、シェバという地の女王です。シェバというのは、アラビア半島の最南端の西側のアラビア湾沿いにあく地です。その女王が、2000 キロメートルも北の地のパレスチナにやってきたのです（第一列王記 10 章）。その目的は、ソロモンからの知恵を得るためでした。「その女王が裁きの時には、今の時代の人々と共に復活して彼らを罪にさだめる」（聖書協会訳）とイエスは言われた上に、「しかし、ここにソロモンよりもまさった者がいます」とご自身について証しされているのです。

②ヨナの説教で（32）『『ニネベの人々が、さばきのときに、この時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです。』』

また、ヨナの説教を聞いて悔い改めたニネベの人々は、「今の時代の者たちと共に復活し、この時代を罪に定めるであろう」（聖書共同訳）とイエスが言われたほどに、この時代の罪深さは深刻でした。そのような言い方イエスは当時の人々に対して悔い改めを促しておられるのです。しかし、それほどはっきりとした悔い改めへと人々を導いたヨナにもはるかにまさった者がここにいて、イエスはご自身についての証ししておられるのです。

《結論》

今朝の聖書箇所のもとめとして、29 節以下から考えていきます。ここには、ソロモンの時代の人々とイエスの時代の人々、ヨナの時代の人々とイエスの時代の人々が対比されながら、この時代（イエスの時代）の人々に対する罪の悔い改めが促されています。

まず、ソロモンの時代の事から見ていきます。既に確認しましたように、シェバの女王は、南の地からソロモンの名声を伝え聞いて、難問をもってソロモンを試しに来たのです。貢ぎ物を携えやってきた女王は、心にあったすべてのことをソロモンに質問したのです。すると、ソロモンはそのすべてを説き

明かしました。彼女にはソロモンの知恵とその宮殿や人々の対応などに圧倒され、息も止まるほどでした。彼女はソロモンとその国の様が聞いていた以上であることに満足し、帰国して行きました（1 列王 10:1～13）。ここで課題として提出されていることは、シェバの女王が「さばきの時には、イエスの時代の人々と共に立って、彼らを罪に定める」（31）という点です。そもそも、彼女はソロモンと出会う聖書の神に出会い、神の御言葉をいただいたのかということが問われるでしょう。そこでヒントとなるのは、ソロモンが「主の宮でささげた全焼のいけにえを見て」息も止まるばかりであった」（5 節）とあるところからです。彼女はソロモンが導くその礼拝行為に共にあずかっているという点です。女王は全焼のいけにえが自らの罪のためであるということをお教えられ、促されてともにその礼拝を受け入れていたと考えられます。だからこそ、主イエスはここで、南の女王が「この時代の人々と共に立ち、彼らを罪に定めたと言われたのです。ここにソロモンの行状をとりあげたり、ソロモンの信仰についてとやかく言う必要はここではありません。人々が神の前で悔い改めの促しに応ずるかどうかが問われているのです。

次にイエスが取り上げられたヨナについてです。彼は主から、アッシリヤの都ニネベに赴き、悔い改めを説くようにとの御言葉をいただきました。しかし、彼はそれにそむきヨツパから西の果てタルシシュを目指したのです。しかし、海は荒れに荒れ、ついに自ら申し出て、海に投げ込まれました。主は彼のために大きな魚を備えられ、ヨナを飲み込ませたのです。三日三晩そこにいました。彼は魚の中で祈ります。そしてそこから吐き出されたヨナは改めてニネベに遣わされるのです。そして、悔改めを説きます。すると人々は神を信じ、断食をよびかけ、身分の高い者から低い者まで荒布を着たのです。主イエスはこの出来事に基づき、裁きの時には、そこで悔い改めた人々が、イエスの時代の悔い改めない人々を罪に定めると述べて、悔改めを促されました。

ここで、ヨナが大きな魚の中に三日三晩とどまった後に、吐き出されことはイエス・キリストの十字架と復活という福音を示していると言えます。時代はしるしを求めましたが、人間にとっての最高の「しるし」がここに示されたのです。それは「しるし」を求める人々へのお答えであったのです。

さて、主イエスは、この聖書箇所において、シェバの女王を導いたソロモンとニネベの人々を悔い改めに導いたヨナとをとりあげています。注目すべきは、主は彼らの働きを評価しつつ、自らがそれにまさった方であることを証ししておられることです。興味深いことに、イエスはダビデでなくソロモンを選び、エリヤやイザヤではなくヨナを選んで、彼らよりもまさっていると言われている点です。つまり、人間としての弱さが露わな二人とあえてイエスはとりあげていることです。そんな者たちをも神は愛でて、用いてくださることを見ます。主は弱く、欠点の多い私達をも憐みの目をもって用い、かつそれなりに評価してくださる方です。この主に私たちが心をむけ、悔改め、お従いしていこうではありませんか。